

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00440

研究課題名(和文) アメリカにおける侵略ナラティブの研究 侵略幻想がポスト911文学に及ぼす影響

研究課題名(英文) Invasion Narratives in America

研究代表者

高野 泰志 (Takano, Yasushi)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：50347192

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：「侵略ナラティブ」という概念を明確化し、歴史的に位置づけることで、20世紀の主流作家に与えた侵略ナラティブの深い影響力を解明した。扱った作家はフランク・ノリスやジャック・ロンドンなどの自然主義の作家を始めとし、ヘンリー・ジェームズやイーディス・ウォートンなどのリアリズム作家、アーネスト・ヘミングウェイなどのモダニズム作家である。これらの作品を侵略ナラティブという概念を通じて見ることによって、帝国主義的侵略と領土の侵害に関する恐怖や不安がこの時代の文学的想像力を根底から形作っていたことを明らかにした。世紀転換期における地政学的な力と文化的生産物との相互作用を理解する上で大きな貢献をしたと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年の日本をめぐる外交問題が非常に切迫した状況にあり、SNSを中心とした極端な右傾化やヘイトスピーチなどが大きな社会的問題となっていたことを考えると、他国に対する憎悪を生み出す「侵略幻想」を扱う研究は非常に重要であると考えられる。直接日本の状況を扱った研究ではないものの、日本の今日的状況に適切に対処するのに必要不可欠な研究であると考えている。

研究成果の概要(英文)：Through clarifying the concept of the "invasion narrative" and situating it historically, this study elucidates the profound influence that such narratives exerted on major 20th-century writers. I examined a range of authors, from Naturalist writers such as Frank Norris and Jack London to Realist authors like Henry James and Edith Wharton, as well as Modernist writers including Ernest Hemingway. By analyzing their works through the lens of the invasion narrative, this research illuminates how fears and anxieties surrounding imperial aggression and the violation of territorial sovereignty fundamentally shaped the literary imagination of this era. In doing so, it makes a novel contribution to our understanding of the complex interplay between geopolitical forces and cultural production in the pivotal decades bracketing the turn of the 20th century.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：侵略ナラティブ ナチュラリズム リアリズム モダニズム

1. 研究開始当初の背景

日本をめぐる外交問題が非常に切迫した状況にあり、SNS を中心とした極端な右傾化やヘイトスピーチなどが大きな社会的問題となっていた。本研究は他国に対する憎悪を生み出す「侵略幻想」を扱う研究であり、日本の今日の状況に適切に対処するのに必要不可欠な研究である。

19 世紀末から 20 世初頭にかけて「侵略文学」と呼ばれる文学サブジャンルが爆発的に流行したが、これは近い将来に起こると仮定された侵略戦争を描くことで大衆の恐怖と不安を煽りたてた。しかし現在では文学史上でほぼ無視されており、ほとんど研究の対象となつてこなかった。

侵略文学は、1871 年にイギリス人のジョージ・トムキンス・チェズニーによって発表された「ドーキングの戦い」(“The Battle of Dorking,” 1871) に端を発し、ヨーロッパで大流行した。ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』(*Dracula*, 1897) や H・G・ウェルズの『宇宙戦争』(*The War of the Worlds*, 1898) などこのジャンルの流行に応じて書かれたものである。

このジャンルがアメリカで最初出版されるのは 1890 年である。ヘンリー・グラットン・ドネリーは「打ちひしがれた国」(“The Stricken Nation,” 1890) で、イギリスの侵略を受けて大敗するアメリカの姿を描き出した。このチェズニーの模倣作品は敵国の侵略を受ける可能性を描いて国民の不安を煽ることを目的としている。その後のアメリカの侵略文学では、ドイツに侵略されるアメリカを描いた H・アーヴィング・ハンコックの全 4 巻からなる『合衆国の侵略』(*The Invasion of the United States*, 1916) 程度しか言及すべき作品が出版されていない。近未来の侵略の恐怖を描く文学は、ヨーロッパにはすぐさま普及していったものの、アメリカではさほど多くの作品が書かれたわけではなかった。むしろヨーロッパ侵略文学のアダプテーションに始まって、ラジオや映画など新しいメディアにおいて独自の発展を遂げたのである。

たとえば 1938 年にはオーソン・ウェルズが H・G・ウェルズの『宇宙戦争』をラジオドラマ化しているが、その放送が全米に引き起こしたパニックは、第二次世界大戦前夜にアメリカ人が感じていた侵略への不安を如実に表していると言えるだろう。放送を聞いていた多くの人々が火星人の攻撃をドイツの侵略であると勘違いしていたことから、当時の集合的不安のあり様を見てとることができる。

その後、アメリカにおける侵略ナラティブは 1950 年代の SF 映画の大流行で最初の全盛期を迎える。無数に作られた SF パニック映画には、第二次世界大戦における原子爆弾の投下、その結果としての科学への関心の高まり、大戦後の冷戦による緊張感、その結果としてのソヴィエト連邦と合衆国間での宇宙開発競争、核戦争への不安、共産圏への脅威とパラノイアなどがきわめて複雑に反映されているのである。

2. 研究の目的

本申請課題はこのサブジャンルを歴史的に位置づけ、ここから派生したナラティブが大衆文化だけでなく主流文学にも大きな影響を与えていたことを解明する。これらの作品に伺える「侵略幻想」が、現在に至るまで共通した要素を持ちながらも、時代と政治状況に応じて形を変えてきた点に注目する。本申請課題はこの「侵略幻想」の構造を明らかにしながら、以下の 3 つの点を目的としていた。

1. ヨーロッパで爆発的に流行しながらもアメリカではあまり多くの作品が書かれなかった「侵略文学」が、文学ではなく、ラジオや映画といった新しいメディアにおいて極めて盛んに作られたことを歴史的に位置づけること。
2. アメリカ人にとって、「侵略ナラティブ」がどのような意味を持っていたのか、ヨーロ

ッパなどの国と比較して相対化すること。

3. 大衆文化を頻繁に参照するポストモダンの作家たちに、この「侵略ナラティブ」がどのような影響を与えていたかを解明すること。

侵略に対する想像力を研究することには非常に大きな意味がある。これまで文学史的には無視されてきたサブジャンルに光を当てることは学術的に重要であるのみならず、主流文学作家の想像力に及ぼした多大な影響を明らかにすることで文学史の見直しを行い、「侵略幻想」に対していかに対処していけばよいかを明らかにできるのである。

3. 研究の方法

侵略文学の研究は現在ほとんど行われておらず、イギリスのI・F・クラークがこの分野ではおよそ唯一の研究者といつてよいだろう。アメリカ文学に関しては上記のクラークを除いてはほぼ言及する研究者すらいないが、それはこのジャンル自体の文学的価値が低く見積もられてきたことに加え、アメリカではさほど流行せず、作品も多くないとされることが原因であろう。これまでの侵略文学研究が文学のみを対象にしていたために、新興メディアで花開いたアメリカ独自の侵略ナラティブが見えていなかったと考え、「侵略文学」をラジオや映画などの映像メディアなどに広げ、「侵略ナラティブ」として考える。

そのうえで日本でも盛んに研究されている9/11以降のポストモダンの作品の土台にこれら侵略ナラティブが存在することを明らかにする。ポストモダン文学における大衆文化への引用や言及はもろろんしばしば研究されてきたが、むしろ19世紀以来アメリカの大衆文化に根付いた「侵略幻想」という特徴が受け継がれていることに着目するのである。

4. 研究成果

本研究課題ではアメリカの国立公文書館に赴いての政府関係資料を収集調査することを計画していたが、コロナ禍のために国外に出ることが著しく困難となった。そのため、当初の研究計画を大幅に修正せざるを得ず、結果的に国内で研究可能な主流作家への侵略ナラティブの影響を見ることを中心に据えることになった。

2020年度には2021年3月21日に開催された第9回痛みの研究会において、「痛みの共感と麻酔 『マクティーク』を中心に」と題する招待講演を行った。また2021年3月には『テキストと戯れる』と題する論文集を出版し、「不眠症と神への祈り ヘミングウェイの戦争後遺症再考」という論文でアーネスト・ヘミングウェイの戦争小説を取り上げた。

2021年度には2021年5月9日に開催された第66回九州アメリカ文学学会大会シンポジウムにおいて、「沈黙の共謀 『トワイライト・スリープ』と痛みの表象」という発表を行った。また2021年10月3日には第60回日本アメリカ文学学会全国大会シンポジウムにおいて「動物と機械のはざままで SF映画に描かれる進化と獣姦」と題する発表を行った。また2022年3月には『アメリカ研究』第56号に「比喩との抗い ジャック・ロンドンの頼病表象」という論文を掲載し、ジャック・ロンドンの侵略ナラティブを分析した。また『ヘミングウェイ批評 新世紀の羅針盤』『ヘミングウェイ批評 三〇年の航跡』と題する2冊の論文集を刊行した。

2022年度には、2022年5月22日に第94回日本英文学会全国大会シンポジウムにおいて「イーディス・ウォートンの植物的想像力」と題する発表を行った。

2023年度は継続して論文執筆を行い、それらをまとめて著作の形で準備中であり、近日刊行予定である。これはこの4年間にわたる「侵略ナラティブ」研究の集大成になる予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高野 泰志	4. 巻 56
2. 論文標題 比喩との抗い ジャック・ロンドンの癡病表象	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アメリカ研究	6. 最初と最後の頁 93～112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11380/americanreview.56.0_93	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高野泰志
2. 発表標題 イーディス・ウォートンの植物的想像力
3. 学会等名 日本英文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高野泰志
2. 発表標題 沈黙の共謀 『トワイライト・スリープ』と痛みの表象
3. 学会等名 九州アメリカ文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高野泰志
2. 発表標題 動物と機械のはざままで SF映画に描かれる進化と獣姦
3. 学会等名 日本アメリカ文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高野泰志
2. 発表標題 痛みの共感と麻酔 『マクティーン』を中心に
3. 学会等名 痛みの研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 千葉義也、倉林秀男、フェアバンクス香織、前田一平、中村嘉雄、中村亨、高野泰志、辻秀雄、山本洋平、古谷裕美、平井智子、本荘忠大、柳沢秀郎、真鍋晶子、今村楯夫	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 ヘミングウェイ批評：新世紀の羅針盤	

1. 著者名 島村法夫、前田一平、今村楯夫、千葉義也、谷本千雅子、長谷川裕一、塚田幸光、柳沢秀郎、陸君、倉林秀男、新関芳生、真鍋晶子、辻秀雄、高野泰志ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 490
3. 書名 ヘミングウェイ批評：三〇年の航跡	

1. 著者名 高野 泰志、竹井 智子、中西 佳世子、柳楽 有里、森本 光、玉井潤野、吉田 恭子、島貫 香代子、杉森雅美、水野 尚之、四方 朱子、山内 玲	4. 発行年 2021年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 344
3. 書名 テキストと戯れる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------